

ことの起こりは、諸岡進也もろおかしんやだった。

これは非常に不正確な表現で、文法にも反しているかもしれない。が、俺はあえてそう言うことにする。

俺も常々、人間たちでも、俺たち犬族でも、煎じつめればきつちりと二種類に分けることができると思っっている。その二種類とは、好むと好まざるとにかかわらず「ことを起こす」タイプと、起こったことを「あと始末する」タイプだ。これは碁石のようにはつきり分れていて、オセロの駒のように途中でひっくりかえるということは、まずない。

諸岡進也は間違はなく、前者に属する。俺にもし、人間の言葉をあやつることのできる喉と舌があつて、そう言つてやることができるとしたら、

「オレだつて好きでもめごとを呼んでるわけじゃねえつて」

と、あの口の減らないガキめは反論するだろう。が、事實は事實である。進也というのは、乗車率二〇〇パーセントの満員電車の中で、わざわざマル暴さんの足を踏んでしまうというタイプなのである。しかも、ロンドン・ブーツを履いて。

申し遅れたが、俺の名はマサ。蓮見探偵事務所はすみたんていじむしょの用心犬である。

百科事典的な分類によると、俺は「ジャーマン・シェパード」というものであるらしく、これは一般に獠猛じゆうもうであると言われているらしい。「ジャーマン」というのはドイツのことであるらしいが、俺はそこへ行ったことがないし、将来的にも行ける見込みはないので、どんな土地なのかはよくわからない。ただ、糸ちゃんいとちゃんがひいきにしている商店街のパン屋さんに「ジャーマン・ペーカーリー」という店があり、そのパンは、彼女に言わせると、「めっちゃめっちゃ美味しくて、安い」そうだから、「ジャーマン」という土地は、うまいパンが焼けて、勇猛で忠誠心にあふれた犬がとれるところなのであろう。めでたいことである。

蓮見事務所はすみじむしょに世話になる前、俺は警察の飯を食つていた。平和な暮らしをしている人ならテレビのニュースで見かけることのない、「警察犬」というものだったのだ。

引退してから、もう丸五年が過ぎた。時々、ちょっと昔が懐かしくなることがある。が、ほんのちよつぱりだけだ。夢に見るほどではない。

フリーになつて最初の一年は、ある監査医の先生の家をやつかいになった。この先生、人間たちがよく言う「学者バカ」という感じの人だったが、俺には優しかったし、毎日の散歩も忘れなかった。俺はそこで、警察犬時代に知っていた方がよかつたな、と思うことを、たくさん見聞きしたものだ。

ところが、俺と一冬を越しただけで、先生は病に倒れてしまった。幸い命は助かったが、心2

臓に問題があるのだそうで、入院生活は長いものになった。先生は奥さんと二人きりの暮らしだったから、その奥さんが病院につきつきりということになれば、俺を飼う時間的なゆとりも、心の余裕もなくなってしまうのは、当たり前のことだ。

奥さんは、それを大変に気に病んだ。

「ごめんね、また留守番させるけど」と謝りながら病院に出かけていく。

(あんまり心配かけないうちに、フラツといなくなろうか)と、俺は思っていた。

そんなとき、その俺を「うちで飼いたい」と言ったのが、蓮見浩一郎氏だったのだ。すなわち、ここ蓮見探偵事務所の所長である。

所長は、先生の大学での同窓生だった。で、病室の先生を見舞ってくれたとき、俺の話を奥さんから聞かされた、ということだったらしい。

「うちの娘どもが、前から犬を飼いたがってまして。せがまれて困っているところだったんですよ」

話がまとまり、俺をつないだ革紐を手にニコニコと自宅に向かう所長のあとに従いながら、正直、俺は不安だった。「娘ども」と呼ばれるのは、いったいどんなお嬢さんたちであろう？

「おーい！」

自宅の傾きかかった門の前で、所長は大声を出した。

「犬が来たよ！」

来たんじゃないで連れてこられたんだよ、などと思っている俺の前に、何か非常にすばしいものがパツと飛び出してきた。

それが蓮見糸子嬢——糸ちゃんだった。そのあとを、笑いながら追いかけてきたのが加代ちゃん——蓮見加代子嬢だったのである。

あのころは、加代ちゃんは短大の二年生で、就職活動の真っ最中だった。七歳年下の糸ちゃんはまだ中学の一年生。ほっぺたは真っ赤で、ふっくらしていた。

今なら、所長がこのお嬢さん二人をつかまえて、「娘ども」と言うことの意味が、俺にも理解できる。要するに照れているのだ。

加代ちゃんも糸ちゃんも、俺を歓迎してくれた。が、「大歓迎」でなかった理由は、「いい犬だね。でも、子犬じゃないんだね」という糸ちゃんのセリフで説明がつく。

人間でもそうだと思うが、一本立ちしてから——しかも俺のように一仕事終えた年代になつてから——始める共同生活というのは、かなり難しいものだ。蓮見家の面々が、監察医の先生夫婦と同じようにあつたかい人柄だと察することはできたものの、俺はまだ、用心深く円を描いて彼女たちの周囲をぐるぐる回るような接し方をしていた。彼女たちも同じような感じだった。飼犬の場合、さっと抱きあげて頬ずりしてもらうことが不可能なサイズに成長してしまつと、いろいろと不利なことが多い。

だいいち、当時の俺は名無しの権兵衛だった。監察医の先生は、俺を警察犬時代の呼称で呼

んでいたのだが、蓮見姉妹は、それでは堅苦しいと思ったのだろう。しきりと名前を考える。だが、なつかない俺に、ぴたりとはまるものが見つからないまま、「うちの犬」というきわめて正確だが素っ気ない呼び方をしていた。

そんな「角」をとってくれたのは、糸ちゃんだった。

そのころの俺は、蓮見家の小さな庭の隅に小屋をつくってもらい、寝起きしていた。そこで、妙ななあと思うことがあったのだ。

糸ちゃんが、毎晩俺をのぞきに来るのだ。縁側の窓を細く開け、そっと首を出して。所長も寝てしまったあとのことだから、夜もかなり更ふけている。だから糸ちゃんはいつもバジャマ姿で、寒そうに首をすくめていた。

(何してるんだい、お嬢ちゃん) と思いながら、俺は知らん顔をしている。すると、彼女は三十分ほどでいなくなる。その繰り返しだった。

十日目に、窓際に立つ糸ちゃんの肩に、加代ちゃんが手を置いた。

「毎晩ここで何してるの？」

糸ちゃんは姉さんを見上げると、小さくつぶやいた。

「お姉ちゃん、知ってたの」

「うん。だって、お布団を抜け出していくんだもの、どうしたの？何か心配事があるの？」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。